

ちば文化資産に選定

「流鉄の景観」

石井一彦



本年3月に「流鉄の景観」が次世代に残したいと思う『ちば文化資産』に選定されました。

まず選定の経緯について概略を説明し、選定理由や「流鉄の景観」の内容は推察も加えて、詳述いたします。

千葉県では2020年の東京オリンピック・パラリンピック8競技の県内開催を、県の文化的魅力を国内外に発信するチャンスととらえ、県民が地元の文化資産の価値を再認識する機会を作るため、2017年に「ちば文化資産」を広く県民から募集しました。

649件の応募があり、そこから211件に候補を絞り、県民投票を実施、さらに有識者の意見を加え、2018年に111件の「ちば文化資産」が選ばれました。

実は「流鉄の景観」も211件の候補に入っていたのですが、残念ながら選にもれませんでした。

ところが、本年が千葉県誕生150周年にあたることを記念して、「ちば文化資産」を合計150件にするための追加選定が行われ、今回選定された39件の中に「流鉄の景観」が入ったのです。

では「ちば文化資産」とはどのようなものか、県ホームページの「ちば文化資産とは」を引用します。

「県内の文化資産のうち、県民参加により選定した、多様で豊かなちば文化の魅力の特徴づけるモノやコトとします。伝統的なものに限定せず、現代建築や景観等、千葉県の文化的魅力を発信するモノやコトを含みます」

これだけでは少しわかりづらいので、さらに県ホームページを見てゆくと「募集・選定要項」に、文化資産候補を評価する6つの視点について説明がありました。

- ① ちば文化の魅力の特徴づける優れた文化資産であるか
 - ② 次世代に継承する価値があるか
 - ③ 新たな視点を加えたものか
 - ④ 伝統的に受け継がれてきたものか
 - ⑤ 保存・継承する取り組みがされているか
 - ⑥ 見聞・体験できる機会が確保されているか
- つまり次世代に継承すべく伝統的に受け継がれた優れた文化資産で、そこに新たな視点を加え、保

存・継承のための取り組みが行われ、誰もが見聞体験出来る機会が確保されたモノやコトであるかどうかの評価の鍵となります。

ただし、県のホームページには電車の写真と簡単な説明が掲載されているだけで「流鉄の景観」の内容、応募者名、選定理由などは明らかにされていません。

そこで今回選定された理由と「流鉄の景観」の内容について推察してゆきます。

「流鉄の景観」で最初に思い浮かぶのは「ちば文化の魅力の特徴づける優れた文化資産」みりんとの関係です。貨物輸送は廃止されましたが、以前は本線からみりん工場への引き込み線がありました。その跡が道路になり半円形のカーブを描いて、流山駅から流山キップコーマンの敷地手前まで伸びているのは今でも確認できます。

また、流山キップコーマンの塀には壁画が飾られ、流山まちなかミュージアムになっており、当時の引き込み線の様子が分かります。そして、流山駅は「東京近郊にある昔なつかしい駅舎」として「関東の駅100選」に選ばれました。

つぎに、私が注目しているのは、流鉄の電車や駅の音風景です。首都圏の電車の車内や駅は電子音が溢れていますが、流鉄では車

製の駅名看板や、窓口で買える硬券の乗車券も人気があり、流鉄に乗るたびに、多くの人がもう戻れない時代への追憶の念を呼び覚まされるのだと思います。



ここまですが「伝統的に受け継がれてきた」景観ですが、選定では「新たな視点を加えた」点が評価されます。「新たな視点」として流山駅隣のmachininの活動は注目に値します。

運営母体のMaCreation代表手塚純子さんの著書『もしわたしが「株式会社流山市」の人事部長だったら』によれば、machininはタクシーの車庫だった建物をリノベーションし、2018年に開設したそうです。

内アナウンスを除き、ほとんど電子音が聞こえないので、構内に入った瞬間にホッとしませんか。また、ネット上では流鉄に対して、ほっこり、レトロ、昭和といった言葉が多く用いられ、ホーロー

machininでは「流鉄の景観」を「見聞・体験できる」のです。奥にある大きな半円形の窓からは、誰でも窓越しに整備中の電車を至近距離で見られます。

流鉄を愛する若者が大学生の時に制作した左手奥の流鉄ギャラリーには電車の模型、路線図、歴代車両図鑑などの資料があります。右手には小さな図書館もあり、北野道彦著『総武流山電鉄の話「町民鉄道」の60年』を閲覧できます。

さらに、英国人アーティストのクレア・ウォレスさんが流山にホームステイして描いた「約100メートルの流鉄壁画」は新たな「流鉄の景観」と言えましょう。そして何よりも感心するのは、

流鉄自らの「保存・継承する取組」が、近年目覚ましい成果をあげていることです。

2005年につくばエクスプレスが開通し、利用客が減少する中、ワンマン運転の完全実施などの合理化を進める一方で、観光鉄道的な取組も推進しています。

流鉄では2両編成で、5種類ある全車両に異なった名がつけられ、車体色も塗り分けられています。

私たち沿線住民には見なれた風景ですが、このような車体運用は鉄道では極めて珍しいそうです。

またスタンプラリーや流鉄BEER電車など以前から続く活動

に加え、新たな展開として、車両基地見学ツアーのような販促活動や、流鉄キャラのりゅうのしんや、鉄道むすめなどのキャラクターを送り出し、関連グッズを販売するなど積極的な活動が目立ちます。

なかでも最高傑作はオムライス電車ではないでしょうか。

車両不都合のため、苦肉の策で、赤色と黄色の電車を連結して運行したところ「オムライスのように」との声があり、記念のヘッドマークやオリジナルグッズまで作られるなど、大評判になりました。これもまた新たな「流鉄の景観」だと思います。

以上の通り詳述してきましたが、千葉県が応募者名や選定理由を伏せる理由は、県民参加に意義があるので、県民が自由に自分なりのやり方で文化資産を愛しんでほしいと望んでいるため、と推測したいのですが、いかがでしょうか。最後になりましたが、流鉄及び関係者のみなさんの努力に感謝すると同時に、私たち沿線住民も「次世代に残したい」という言葉の重みを共有したいと思います。